■ フォト・エッセイ ■

淡水、台北人の海岸

写真・文
エリック・レヒシュタイナー
Eric Rechsteiner ／ panos pictures

淡水川を行き来するフェリーボートの船着き場

台湾の首都、台北。大小の建物が所狭しと立ち並び、人々の動きもせわしく、空気汚染が激しい多くのアジアの大都市と並んで、台北もその一つに数えられる。しかし、淡水川河岸の内陸地に広がるこの街は、市民にとっての安らぎとなるある種の「開風口」を有することで他とは一線を画する。街の中心から地下鉄（ＭＲＴ線）に乗って四五分、そこは淡水（タンシュイ）と言って、同じ名を持つ川が海に流れ込む河口岸の町である。淡水は「海辺の台北」とでも言えようか、時間の惜しい都会の生活者にはうってつけの距離位置にあって、市民の憩いの場となっている。常に街よりも涼しく、満ち潮が岸辺を伝い、景観をかたどっている。距離にしてわずか二〇キロメートルであるが、地下鉄から降りた途端に空気が変わったのを感じ、海の香りと潮風が訪問者を包む。

淡水はしかし、都会生活者にとってのごく身近な田舎町として存在するだけではなく、台湾の中でも特に歴史の濃く詰まった場所でもある。一七世紀初めにスペイン人の一団、とりわけサント・ドミンゴ教会布教団がこの地に居を据えたのが、先住民以外の初めての住民であった。一六四一年にはスペイン人を追いやってオランダ人がこの地に入り、東インド会社総督アントニオ・ヴァン・ディーメンを称えてのアントニオ要塞を建設（改築）した。この建造物は今も町を見下ろすようにそびえ立っており、

漁師達が沖で捕れたエビを並べて売っている

オランダ人の赤毛にちなんで「紅毛城」と呼ばれている。

淡水は、中国に近いという点、自然に形成された港の有利さからオランダ人統治のあとも発展を続け、一九世紀半ばには台湾で一番規模の大きい漁港および商港となった。

この町の歴史に名を残す人物として、宣教師であり医者のジョージ・レスリー・マッケイが挙げられる。一八七二年に淡水に移り住み、そこに台湾で初の西洋医学による病院と、台湾でも指おりに古い高等教育機関である「オクスフォード・カレッジ」を開いた人物である。

フォルモサ（中国語では美麗島と表記される台湾の別名）が日本の統治下にあった時期、河に堆積物がたまり、それに伴って港としての淡水の規模は縮小した。二〇世紀に入って、港の機能の主要部分は島北部の基隆（キールン）に移り、規模を縮小した淡水の地元経済は農業に頼るようになったのだった。

ここ一〇年余りの間に、地下鉄の開通によって、台北市民は眠りに落ちていた一漁村、淡水を再発見した。

淡水川に沿う道筋は観光客向けの散歩道に整備されるなど、多くの訪問者を迎えるために町は大きく変化した。そのあまりに急速な発展と、それに伴って発生する公害

が、かつての地元産業の続行へ多大な影響を及ぼしている。木製で彩色が施された優美な小船での漁、川沿いに建つ大杭上の家やマングローブ地帯は、リバーサイド・パークや、伝統工芸品をうたった土産物屋の並ぶ野外市場での商売に取って代わり、行きする乗客船の増加で川に生息する野生動物の存続は危ぶまれる。

人々は淡水に主に家族連れで出かける。そして、数知れずほどある店や屋台で名物料理を楽しむのだ。例えば鐵の卵の意である「鐵蛋」、「阿給」（油揚げの中に春雨を詰め、魚のすり身で蓋をして蒸したもの）、「淡水魚丸湯」（中に肉とニンニクを詰めた魚のすり身がスープに入っている）などが知られ、また淡水の漁師から直接買えるエビなどもある。

また淡水は目の前にパノラマのように広がる景色の美しさで名高く、夕暮れ時にここを訪れゆっくりと日の入りを眺めるのは、台北の人々にはいつしか馴染みとなった過ごし方である。そして中国文化の恒例で、岸辺の夜空に上がる花火が一日の終わりを彩る機会が定期的に設けられている。

淡水は、結婚写真の撮影場所としても知られる。汚染の激しい河岸であっても、若いカップルにとっては恰好のロマンティックな背景となるため、彼らの結婚記念のア

若い女性と、彼女の選んだ大提灯

PHOTO ESSAY
台湾 / Taiwan

若いカップルが写真家の注文に応える

ルバムを飾る写真のために長い時間とエネルギーとがそそがれる。撮影に立ち合うと、彼らの忍耐力に敬服の念さえ生じてくる。花嫁は裾の長いドレスをまとい、正装した花婿とともに写真家の注文に忠実に応え、しばしばわざとらしくもあるポーズをとり続けるのだ。そのようなカップルを時には何組も一度に目にするのが、淡水のまた別の一面なのである。

そしてなにより中国暦の新年に淡水を訪れる甲斐こそおおいにあるだろう。この時期、油を染みこませた紙で作られた巨大な提灯（灯籠）が、備え付けた小さなろうそくの力を借りて空に舞い上がる。訪問者はそれぞれ好きな色の提灯を買い求め、そこに金銭、健康、恋愛、学業の成就など各々の新年への望みを書き込む。そして提灯が空高く上がって彼方に消えゆくか、あるいは海に落ちてしまうかで、新しい年の運を占う。多くの人々が、心配そうに自分の提灯を目で追う姿がある。光を抱いた優美な姿で、提灯は人々の未来への思いを乗せて飛んでゆく。

（エリック・レヒシュタイナー／写真家）